

mois de la critique

映画 / 批評 月 間

東京 / 横浜
Tokyo /
Yokohama

《フランス映画の現在をめぐって》

Nouveaux rendez-vous
du cinéma français

Vol.02

3.12 [木] → 4.19 [日]

du jeudi 12 mars au dimanche 19 avril

会場 Lieux

ユーロライブ

Euro Live

アン스티チュ・フランセ東京 エスパス・イマージュ

Institut français du Japon _ Tokyo, Espace image

kino cinéma 横浜みなとみらい

kino cinéma Yokohama Minatomirai

横浜シネマ・ジャック&ベティ

Yokohama Cinema Jack & Betty

企画協力・ゲスト Programme conçu avec

オリヴィエ・ペール (アルテ・フランス・シネマ ディレクター)

Olivier Père, Directeur d'Arte France Cinéma

ゲスト Invités

セルジュ・ボゾン Serge Bozon

青山真治 Shinji AOYAMA / 富田克也 Katsuya TOMITA

五所純子 Junko COSHO / 廣瀬純 Jun HIROSE / 岡田秀則 Hidenori OKADA

須藤健太郎 Kentaro SUDOH / 土田環 Tamaki TSUCHIDA / 結城秀勇 Hidetake YUKI

Madame Hyde de Serge Bozon

INSTITUT
FRANÇAIS
アンスティチュ・フランセ日本
Japan

vivre
les
cultures

昨年よりスタートした「映画批評月間」では、フランスの映画媒体、批評家、専門家、プログラマーと協力し、最新のフランス映画を選りすぐり、ご紹介しています。

第2回目となる今回は、フランスだけではなく、世界中の主要な映画作家たちの製作を積極的に支援しているアルテ・フランス・シネマ ディレクター、元ロカルノ映画祭ディレクターのオリヴィエ・ペールにフランスの近作より最も優れた作品のセレクションを依頼。それらの作品の上映とともに、日本の映画批評家たち、監督たちと同氏のディスカッションも予定しています。そのセレクションの一本『マダム・ハイド』の監督セルジュ・ボゾンを特別ゲストに迎え、ミュージカルコメディから、歴史劇、学園ものから犯罪映画まで、その多彩なフィルモグラフィーを一挙ご紹介します。

ボゾン監督ほか多くの映画人に敬愛を受け、2019年8月に惜しくもこの世を去ったジャン＝ピエール・モッキーを併せて特集します。コメディ、サスペンスと独自の作風を持ち、カルト的人気を誇るモッキーは日本でこれまでほとんど紹介されることがありませんでした。フランス映画の「最後の切り札」とも言えるモッキーの世界をぜひこの機会に見てください。

アルテ・フランス・シネマ Arte France Cinéma

アルテ (Arte, Association Relative à la Télévision Européenne) は、1992年5月30日に開局したドイツとフランスの共同出資によるテレビ局で、フランス語およびドイツ語で放送。アルテ・シネマ・フランスは同局の映画部門。1990年、プロデューサーのピエール・シュヴァリエが同テレビ局で良質のテレビプログラム・映画作品を製作すべく、セット = アルテからセット・シネマを立ち上げた。2000年にセット = シネマは新たにアルテ・フランス・シネマに。アサイヤス、アケルマン、クレール・ドゥニらがそれぞれ自らの思春期について撮ったシリーズ「彼らの時代のすべての少年、少女たち」はシュヴァリエによる企画。創立以来、アルテ・フランス・シネマは良質なプログラムを提供し、ヨーロッパのみならず世界中のクリエイションに活力を与えることをその役割としている。2012年より、オリヴィエ・ペールがディレクターに就任。ワン・ピン、ジャ・ジャンクー、ヌリ・ビルゲ・ジェイラン、アリーチェ・ロールヴァケル、マルコ・ヴェロッキオ、ラヴ・ディアス、黒沢清ほか数多くの作家たちの作品を製作支援している。

2019年ベスト アルテ共同製作作品

Best of 2019 Sélection d'Arte

arte



アリスと市長 Alice et le Maire de Nicolas Pariser

(フランス / 2019年 / 105分 / カラー / デジタル)

監督: ニコラ・パリゼール 出演: ファブリス・ルキーニ、アナイス・ドゥームスティエ、ノラ・ハムザウほか

リヨンの市長ポール・テラノーは、「アイディア」が一切浮かばなくなり、若き哲学者アリスに助けをを求めることに。

『木と市長とメディアテーク』では高校教師を揚々と演じたルキーニが26年後、まさにロメーリックコメディで、爛し銀の魅力で老いとともに人生を見つめ直す市長を演じる。そして、大きな瞳と潑刺とした魅力で、観客の心を捉える人気の若手女優、ドゥームスティエ演じる哲学者との真摯で、遊戯に満ち、心打たれる対話によってお互いが「アイディア」を、そして「人生」を取り戻していく。第72回カンヌ国際映画祭監督週間出品。



君は愛にふさわしい Tu mérites un amour de Hafsia Herzi

(フランス / 2019年 / 107分 / カラー / デジタル)

監督: アフシア・エルジ 出演: アフシア・エルジ、ジェレミ・ラウルト、ジャンス・ブジアニほか

何よりも大切な恋人レミの裏切りを知り、リラは苦しむ。单身ボリビアに旅立ったレミから、二人の関係はまだ終わっていないと告げられるが、その言葉によってさらに苦しむリラは、友人たちとの会話、新たな出会いの中でもがき、愛の行方を求めて彷徨う…。寄る辺なく生きる現代の若者たちの恋愛をアブデラティフ・ケシシュやアラン・ギロディらの作品に出演している女優、エルジが初監督、主演。第72回カンヌ国際映画祭批評家週間で上映され、「宝石のように美しいラブストーリー」と絶賛された。タイトルはフリーダ・カーロの詩の言葉から。



リベルテ Liberté d'Albert Serra

[R16+]

(フランス = ポルトガル = スペイン = ドイツ / 2019年 / 138分 / カラー / デジタル)

監督: アルベルト・セラ 出演: ヘルムート・バーガー、マルク・スジニ、イリアーナ・ザベート、リュイス・セラ (ほか) ジャン＝ピエール・レオ主演の『ルイ14世の死』が日本でも公開された鬼才アルベルト・セラが今度はフランス革命前夜の18世紀の退廃貴族たちの性、欲望のありか、サド的世界に迫る。ルイ16世のピューリタンの厳格な宮廷から追放された自由主義者達は、伝説的ドイツ人公爵ワルシュンの支援を求めて国境を越える。2019年カンヌ国際映画祭「ある視点」部門審査員特別賞受賞作品。「私にとって撮影とは上演 (パフォーマンス) であり、一度限りのものだ。演じられている中で生まれるもの、感情を、それぞれが自律的な3台のカメラで撮影し、それらは再び生み出すことが不可能であり、とくにセックスが題材であればなおさらそうである。」——アルベルト・セラ



シノニムズ Synonymes de Nadav Lapid

[R15+]

(フランス = イスラエル = ドイツ / 2018年 / 123分 / カラー / デジタル)

監督: ナダヴ・ラビド 出演: トム・メルシエール、カンタン・ドルメール、ルイズ・シュヴィヨット (ほか)

『シノニムズ』は、パリの空っぽのアパルトメントで凍えそうになった裸体と共に、象徴的な死とある誕生によって幕を開ける。物語は、祖国イスラエルからパリへと亡命し、文化、言語、国、すべてを白紙に戻し、未知の場所でゼロから生きることを選んだラビド監督自身の人生から着想を得ており、主役のヨアブは監督の分身であるだろう。本作はラビドがこれまで続けてきた試みのひとつの到達点でもある。それは通常なら詩的なものからほど遠いであろう憎しみや嫌悪の言葉や映像を結びつけ、それらの衝突の中から、そして視線の中から美を導き出すという試みである。」——オリヴィエ・ペール
第69回ベルリン国際映画祭金熊賞受賞。



見えない太陽 L'Adieu à la nuit d'André Téchiné

(フランス = ドイツ / 2019年 / 102分 / カラー / デジタル)

監督: アンドレ・テシネ 出演: カトリーヌ・ドヌーヴ、ケイシー・モットー、クライン、ウーヤラ・アマムラ (ほか)

2015年春。地方で牧場や農場を営むミュリエルは、久しぶりに帰ってきた孫息子アレックスとの再会に心躍らせる。しかしアレックスがイスラム教に入信し、しかもその教団がシリアのイスラム教テロリストたちとつながりがあり、アレックス自身もシリアに向かおうとしていることを知ったミュリエルはなんとか彼を引きとめようとするのだが……。ドヌーヴがもっとも信頼を置くと言っている名匠アンドレ・テシネとの8本目の本作で、つねに目の前の対象に開かれ、その度に繊細な演技をみせてきた大女優の魅力が最大限に引き出されている。

DVD発売中 KKDS-891 4,800円(税抜) / 発売元: ビターズ・エンド、ミッドシップ / 販売元: 紀伊國屋書店



ディアスキン 鹿革の殺人鬼 Le Daim de Quentin Dupieux

(フランス / 2019年 / 77分 / カラー / デジタル)

監督: カンタン・デュビユー 出演: ジャン・デュジャルダン、アデル・エネル (ほか)

鹿革ジャケットを手に入れたジョルジュは、異常なまでにそのジャケットに愛着を抱く。ひよんなことからビデオカメラも手にしたジョルジュは、ジャケットを羽織り、映画監督に扮して街へ繰り出し、“死のジャケット狩り”を開始する。フランスのエレクトロニックミュージシャン、DJとしても著名なデュビユーがジャン・デュジャルダンと初めて組んだスリラーで、2019年カンヌ国際映画祭監督週間のオープニングで上映され人気を博した。注目の女優アデル・エネルが唯一、狂気に包まれた男に勇ましく対峙していく姿が強く、美しい。



カブールのツバメ

Les Hirondelles de Kaboul de Zabou Breitman et Éléa Gobbé-Mévellec

(フランス = ルクセンブルク = スイス / 2019年 / 82分 / カラー)

監督・脚本: ザブー・ブライトマン、監督: エレア・ゴベ・メヴェレック

声の出演: ジタ・アンロ、スワン・アルロー、シモン・アブカリアン、ヒアム・アッバス (ほか)

1998年夏、アフガニスタンのカブールはタリバン勢力の支配下に。ズナイラとモーセンのカップルは、暴力と悲惨な現実の中でも希望を持ち続けていたが、ある行動が災いし…。大文字の歴史の中で翻弄される夫婦や恋人たちの日常のささやかなやり取り、感情が繊細に描かれ、心をつつ傑作アニメーション。スワン・アルローら、フランスで現在人気上昇中の俳優たちが声で出演している。2019年カンヌ国際映画祭ある視点部門コンペティション出品。

Rétrospective Serge Bozon

セルジュ・ボゾン特集

1972年、フランスのエク = アン = プロヴァンス生まれ。1988年に初長編作『友情』を発表。次作のミュージカルコメディ『モッズ』(2003年)でベルフォール国際映画祭にてレオ・シェア賞を受賞、その他30以上の国際映画祭にノミネートされる。第一次世界大戦を描いたシルヴィー・テストュー主演の『フランス』(2007年)でジャン・ヴィゴ賞を受賞。その後、イザベル・ユペール、サンドリン・キーベルラン、フランソワ・ダミアン出演によるコメディ『ティップ・トップ ふたりは最高』(2013年)を発表、カンヌ国際映画祭の監督週間にて上映。さらにイザベル・ユペール主演の最新作『マダム・ハイド』では、第70回ロカルノ国際映画祭インターナショナル・コンペティション部門に選出、ユペールは本作で主演女優賞受賞。また監督以外にも映画批評家、俳優としても活躍している。



モッズ Mods

(フランス/2003年/60分/カラー/35ミリ) *英語字幕・日本語同時通訳)

出演:ローラン・ラコット、ギョーム・ヴェルディエ、セルジュ・ボゾン ほか

大学のキャンパス、そこに病におかされた学生がいる。彼の兄弟であるふたりの兵士が救いにやってくる。自分達に似ることのないこの世界で居場所がない彼らはそこで様々な人々と出会い、驚きを重ね、病気の弟が残した記憶や、他の場所から聞こえてくる噂、あるいは何処からか聞こえてくる歌に耳を傾ける。



フランス La France

(フランス/2007年/102分/カラー/35ミリ) *英語字幕・日本語同時通訳付

出演:シルヴィー・テストュー、パスカル・グレゴリー、ギョーム・ドバルデュ、ジャン・クリストフ・ブーヴェ、ギョーム・ヴェルディエ、フランソワ・ネグレ、ピエール・レオン ほか

1917年秋。第一次世界大戦の戦火が最も激しくなった頃、若いフランス人女性カミーユは戦地から届く夫の便りのみを待つ日々を送っていたが、ある日、別れの手紙を受け取る。彼女は深く動揺し、愛する夫に会うため、男に変装し危険に満ちた旅に出ようと決意する。その旅の途中で出会った、奇妙な連隊に加わる。彼らは時に、その場でこしらえた楽器を演奏し、ポップ・ソングを歌う。「古典的映画の中で、登場人物たちが歌う歌は必ずしも史実に基づいて選ばれたものではありません。『リオ・ブラボ』でのリッキーのように」——セルジュ・ボゾン



ティップ・トップ ふたりは最高 Tip Top

(フランス = ルクセンブルク/2013年/107分/カラー/デジタル)

出演:イザベル・ユペール、サンドリン・キーベルラン、フランソワ・ダミアン、キャロル・ロシェ ほか

フランス北部でアルジェリア系の情報屋が殺された。その情報屋は、地域のドラッグの密売に関わっていたが、警察署内部を探るため、ふたりの女性監察官、エスターとサリが派遣された。ひとりには殴りこみをかけ、もうひとりには覗き見る…そう、ふたりは最高のコンビ！「ボゾンはかつてゴダールが取った方法を応用してみせる。犯罪映画を口実にまったく別のものを語る。では本作では何が語れているのか、おそらく傑出した前作のタイトルの中にその答はあるだろう、つまり『フランス』である」——オリヴィエ・ペール



マダム・ハイド Madame Hyde

(フランス/2017年/96分/カラー/デジタル)

出演:イザベル・ユペール、ロマン・デュリス、ジョゼ・ガルシア ほか

パリ郊外の高校に勤める内気な物理学の女性教師ジキルは生徒たちから見下されている。ある日、彼女は、実験中に失神し、神秘的で危険な力を感じるようになる。スティヴンソンの代表作『ジキル博士とハイド氏』を、19世紀後半のブルジョワ社会ではなくパリ郊外、現在を舞台に、また男性ではなく女性を主人公に、自由に脚色されたボゾンの最新作。「トリュフォーが『野生の少年』で試みたように、学ぶということを映画でどう描くか、教育の重要性、難しさを見せたかった。そのため、冒頭では主人公はまだにそこに至っておらず、ふつうの方法では変えられない状況にいる。そこにスティヴンソンが介入してくるわけだ」——セルジュ・ボゾン

愛する作品と共に旅を続けること

オリヴィエ・ペール

Compagnon de route et de voyage des films aimés

Olivier Père

映画作家を発見し、その作家が一本、また一本と撮り続けていくために支援する、そしてまた他の作家たちへの賞賛を示し、彼らが作品を生み出して手助けをする。2012年以来、アルテ・フランス・シネマのディレクターに就任したことで、それまでの12年間、カンヌ国際映画祭監督週間、そしてロカルノ国際映画祭でディレクターとして実行してきたそうした活動を、今日まで続けてきました。現在、世界における主要な映画作家たちの作品の共同製作に参加するだけでは十分でなく、そうした作品が観客たちと出会うその重要な瞬間に寄り添い、映画作家たちとは爽やかな対話を作り出していくことが重要です。アンスティチュ・フランセ 日本の提案により、今回初めて日本の映画ファンたちに向けて、アルテが支援している映画作品のセレクションを紹介する機会を得ました。本プログラムでご紹介するのは、とくに私たちが大切に思っている作品たちであり、自由で野心的な映画を支援してきたアルテの精神を体現している作品ばかりです。カンヌ国際映画祭、ベルリン国際映画祭の様々な部門に出品されるヨーロッパ、そして世界中の映画作品の中で、アルテ・フランス・シネマは現代映画作家たちの映画への関わりを強く示してきました。ドキュメンタリーからアニメーション、映画の様々なジャンルの再読解を試みる作品から社会への視線を基軸にした作品、現代に根を下ろしたフィクションから、より奔放なる想像力の探求まで、あるいはそのすべてを包括した作品。そうしたインスピレーションに溢れた映画作家たちに耳を傾け、斬新な作品に寄り添い続けたいという私たちの意思は尽きることがありません。映画の創造に乗り出す新顔の監督たちとくに支援し、一作目、二作目に重要な場所を与えてきました。こうした若い世代の映画作家たちの勢いはまた女性監督たちにもあてはまるでしょう。新人の女性監督たちの中で、とくにマッティ・ディオフ(『アトランティックス』、カンヌ国際映画祭グランプリ受賞/Netflixで放映中)、アフシア・エルジ(『君は愛にふざわしい』)、ザブー・ブライトマン&エレア・ゴベ・メヴェレック(『カプールのツバメ』)は、2019年に素晴らしい作品を発表し、観客にも批評家たちにも温かく迎えられました。多くの女性監督、しかもそのほとんどが新人監督による作品を支援できたこと大変喜ばしく思っています。世界は変化し、そこに向けられる視線も変化している、映画による刺激的冒険はそのことを私たちに伝えてくれます。そうした「新たな視線」こそ歓迎し、応援すべきでしょう。

アルテは未来の巨匠となるであろう若い才能の出現を注意深く見据えてきました。私たちの主な目標はまさにそうした才能溢れる作家たちの重要な瞬間を発見し、支援することです。そうした作家の一人であり、早い時期から——そして当然のこととして——その才能が認められたナダヴ・ラビドは、長編三作目にあたる『シノニムズ』で見事ベルリン国際映画祭金熊賞を受賞しました。その他、アルベルト・セラ(『リベルテ』、次回作『ボラ・ボラ』をすでに準備中)、ニコラ・パリゼール(『アリスと市長』)、セルジュ・ボゾン(『マダム・ハイド』)、カンタン・デュビュー(『ディアスキンの殺人鬼』、私たちが共同製作に関わったこうした作家たちはそれぞれがフランス映画に刺激的な活力を与え、魅力的で、多様な要素が詰まっていた、驚くべき、新たな映像と物語のフォルムを巧みに生み出すことに成功しています。

また2019年は、常に活躍を続けてきた偉大な監督たちの製作にも密接に関わってきました。アルノー・デプレシャン(『ルーベ、嘆きの光』)(WOWOWにて3月放映)、そしてアンドレ・テシネ(『見えない

太陽』)、彼らの作品は現代社会に非常に明晰な眼差しを向け、それぞれに特有な演劇性やロマネスク的な嗜好を損なうことなく、ドキュメンタリー的な側面も持ち合わせています。

それでは今回の目玉であるふたりの「風変わりな」映画作家を紹介しましょう。あるときゴダールはフランス映画システムの中心を外れた自分の状況に触れ「余白こそが紙道を成り立たせているのだ」と主張しました。フランス映画には、抜け道を使うだけでなく、ときには大衆映画のコードと戯れ、狂気じみたスター俳優を共犯者として、フィルモグラフィを築き上げきた一匹狼の作家がほかにいます。ジャン・ピエール・モッキーとセルジュ・ボゾンは、二つの異なる時代において、まさにそうした作家を体現しています。

今回、白紙委任状を受け、2019年8月8日に他界したジャン・ピエール・モッキーの追悼特集ぜひ提案したいと思います。若い時分に俳優としてキャリアをスタートしたモッキーは、1959年に長編処女作となる『今晚おひま?』を監督して以来、フランス映画の中でもっとも私たちが熱狂させる映画作家となりました。ヌーヴェルヴァーグの同時代人でありながら、モッキーは30年代の詩的リアリズムの伝統を引き継いでいます。モッキーの映画には、ユーモアとファンタジーがあると同時にメランコリー、暴力、そして悲劇も存在しています。そのフィルモグラフィの黄金時代には、B級犯罪映画的であると共に、フランス映画の中でも優れた政治的映画を生み出しています。その一本が1970年に撮られた『ソロ』です。

非常に独創的な作品を作り続けている1972年生まれセルジュ・ボゾンは、今日、モッキーの後継者としてよべる存在でしょう。ひそかに展開される不条理とも言えるユーモア、陰謀や謎への嗜好、無味乾燥にも思える作風、速度ある語り、そしてとりわけ「アート系」映画としてごたごたと煽り出すことの拒否、セルジュ・ボゾンの映画の魅力は、(映画史と)断絶しながらもその伝統を受け継ぎ、新たなものを創造しながら、過去の作品の引用もするという、相反する運動の間を自由に往来していることでしょう。

批評家でもあった映画作家セルジュ・ボゾンは、フランス映画史への反旗の記憶を携えながら、無難な道を辿ることをせず進んできました。『フランス』、それはボゾンの映画の重要なテーマです。その歴史(まさにそれがタイトルにまでなっている『フランス』)、フランス共和国の制度や組織(『ティップ・トップ ふたりは最高』の警察や『マダム・ハイド』の学校)、それらが頑強なまでに反自然主義的で、時に不協和音を奏でながらもミュージカル的に描かれてきました。ダンディーな映画作家セルジュ・ボゾンは演出への変わることのない信念に溢れ、勇敢に、映画の炎を燃やし続けています。

Olivier Père

1971年フランス生まれ。シネマテーク・フランセーズで、シネマテークの上映プログラムの企画に携わる一方で、「レ・ザンロキユブティール」誌などで映画批評を執筆。2004年から2009年まで、カンヌ国際映画祭監督週間のディレクター、2008年から2012年までロカルノ国際映画祭のディレクターを務める。同映画祭のディレクション中、富田克也の『サウダージ』、三宅唱の『Playback』などがコンペティションに選ばれ、2012年には青山真治に金豹賞(グランプリ)審査員特別賞が贈られた。2012年にアルテ・フランス・シネマのディレクターに就任、以後、ヨーロッパをはじめ、世界中の映画作家の作品を支援し、共同製作を続けている。またアルテのサイト(<http://www.arte.tv/sites/olivierpere/>)にて定期的に映画評も執筆し続けている。

Rétrospective Jean-Pierre Mocky

ジャン＝ピエール・モッキー特集

1933年ニース生まれ。長編だけでも67本の作品を監督し、フランス映画の中でもどこにも分類できない、ユニークな映画作家。法律の勉強を終えた後、フランス国立高等演劇学校に入学後すぐ、舞台、映画界の両方でその美貌と才能で一気に若手俳優として頭角を現す。ルキノ・ヴィスコンティ監督作『夏の嵐』で助監督を務め、その後、脚本を書き、自ら監督を希望した『壁にぶつかる頭』(1958年)は結局、ジョルジュ・フランジュが監督し、主演することに。1959年によく処女長編作『今晚おひま?』を監督し、商業的、批評的に成功を収める。「ヌーヴェルヴァーグの従弟」のような作品と評されるが、風刺的でメランコリック、そして類をみない反体制的な作風でほかとは一線を画し、メインストリームから外れた場所で、自由に映画を撮り続ける。ラブコメディから風刺的コメディ、あるいは犯罪映画や軍隊もの、政治的作品から幻想的な作品まで、ひとつのジャンルにおさまることなく、慣例化された制度、価値には反旗を翻し、アナーキーな世界観や荒々しいまでのユーモアを一本ごとに刻印してきた。そうしたモッキーの魅力は多くのスター俳優たち、フェルナンデル、ミシャル・シモン、カトリーヌ・ドヌーヴ、ジャンヌ・モローを引きつけ、彼の作品に出演している。名優ブルヴィル、ミシェル・セローとは特に多くの作品でタブを組んできた。2019年8月8日逝去、享年86歳。

今晚おひま? Les Dragueurs

(フランス/1959年/78分/モノクロ/デジタル)

出演: ジャック・シャリエ、シャルル・アズナブール、ダニー・ロバン、アヌーク・エーメ ほか

土曜日の夕暮、フレディとジョゼフは、セーヌ河岸で偶然出会い、女の子を「ひっかけに」街に繰り出す。二十歳の装飾家でプレイボーイのフレディは「理想の女性」を探し求めている。かたやまじめな銀行員ジョゼフは妻を見つけ、家庭を持つことを望んでいる。アンバリッド、サン＝ジェルマン＝デ＝プレ、シャンゼリゼ通り、モンマルトル、彼らは、様々な女性たちと出会い、彼女たちの人生を垣間見ることに。29歳のジャン・ピエール・モッキーが自伝的な要素を交え、ささやかなテーマながら大胆な作風で、ほとんどロケで撮り上げた処女作。日本で公開された唯一のモッキー監督作品でもある。

言い知れぬ恐怖の町 La Cité de l'indicible peur

(フランス/1964年/92分/モノクロ/デジタル)

出演: ブールヴィル、フランシス・ブランシュ、ジャン・ポワレ、ヴェロニク・ノルデー ほか

逃亡した偽札偽造者の捜索に乗り出したシモン・トリケ警部は、オーヴェルニュ地方の想像の村、バルジュにたどり着くのだが、そこには摩訶不思議な住民たち、出来事があふれていた……。ベルギーの幻想小説家ジャン・レーの原作を自由に、幸福感と繊細さとともにモッキーが映画化。モッキー作品にかかせない俳優のひとり、ブルヴィルが風変わりな警部役を魅力いっぱい演じている。撮影はラング、オフェルス、ロッセンの作品も手がけた偉大なカメラマン、オイゲン・シュフタン。製作当時あまりにも「とっぴな」作品とされ再編集を強いられたこの傑作「詩的幻想映画」を、今回は監督自ら「ディレクターズ・カット」として蘇らせたバージョンで上映!

ソロ Solo

(フランス/1970年/87分/カラー/デジタル)

出演: ジャン＝ピエール・モッキー、アンヌ・ドゥルーズ、デニス・ル・ギヨ ほか

魅惑のヴァイオリン奏者のヴァンサン・キャブラルは宝石泥棒でもある。彼の弟のヴィルジルはアナーキストのグループに属し、殺人にも手を染めていた。ヴァンサンはこれ以上の殺戮が繰り返されないように、警察より先回りしてヴィルジルを追いかけるのだが……。『70年代、モッキーはB級犯罪映画を自ら主演し、連続して撮っている。アクションに次ぐアクション、そして演出のアイデア満載の本作は、68年五月革命直後についてのモッキー自身の考察から出発している。シニックなアンチヒーローを演じるモッキー、ジョルジュ・ムスタキのテーマ曲によって愁いを帯びたロマンチズムに包まれたフィルムノワール』——オリヴィエ・ペール



*すべて、デジタルリマスター版にて上映。

赤いトキ L'Ibis rouge

(フランス/1975年/80分/カラー/デジタル)

出演: ミシェル・セロー、ミシェル・シモン、エヴリーヌ・バイル ほか

孤独な会社員ジェレミーは赤いマフラーで次から次に女性たちを絞め殺してきた。同じ界隈に住み、賭博好きレーモンは、借金を返済するために愛する妻のエヴリーヌに宝石を売るよう頼む。そんなふたりが出会い、ある計画が立てられることに……。『フレドリック・ブラウンの推理小説『3、1、2とノックせよ』から着想を得た本作は、ファンタスティックかつポエティックにフランス社会を描いたモッキーの代表作のひとつ。本作が遺作となった偉大な俳優ミシェル・シモンへのオマージュでもあり、サン＝マルタン運河沿いで多く撮られていることもあり、とりわけ『素晴らしき放浪者』や『アタラント号』の記憶が蘇ってくる』——オリヴィエ・ペール



奇跡にあずかった男 Le Miraculé

(フランス/1986年/87分/カラー/デジタル)

出演: ミシェル・セロー、ジャンヌ・モロー、ジャン・ポワレ ほか

非合法すれすれでなんとか暮らす気ままなバビュは、保険金欲しさに事故で足が麻痺したと偽り、献身的な元娼婦のサビーヌを引き連れてルルドへと偽の治癒旅行に出発するが……。『社会風刺、反聖職者主義的劇画を超えて、不条理で詩的なアイデアで溢れる驚くほど豪快な本作で、モッキー映画の常連、セローとポワレがミスキャストをおおいに楽しんでいるように見える。優雅な俳優ポワレが小汚く下品な浮浪者、セローは滑稽で口のきけない保険業者を演じ、まるでサーカスの演目を見ているようだ(…)。モッキーは、この縁日のような作品で多種多様な人々をこれまで以上に鮮やかに浮かび上がらせてみせる』——オリヴィエ・ペール



Hommage à Jean Douchet

ジャン・ドゥーシェ追悼

ジャン・ドゥーシェ、ある映画批評家の肖像

Jean Douchet, l'enfant agité de Fabien Hagege, Vincent Haasser, Guillaume Namur

(2017/85分/カラー/デジタル/フランス語/日本語字幕)

監督: ファビアン・アジェージュ、ギヨーム・ナミュール、ヴァンサン・アセル ほか

2019年11月に90歳で他界したフランスの偉大なる映画批評家ジャン・ドゥーシェ。彼は50年以上前から映画批評家として世界中を旅してきた、映画についての伝道師、「渡り守(バサーール)」である。その類まれなる知性、教養、ユーモアによって、映画作家や映画ファンたちに影響を与えてきた。ある晩、三人の仲間たちがドゥーシェと出会い、彼の話にすぐさま魅惑され、ジャン・ドゥーシェという謎も多い男との特権的な関係を持ち始める。「ジャンは映画の意味を自覚めさせる術を知っている。映画の送ってくる手紙を読み解くように。そして美への思い、配慮する気持ちがジャンをここシネマテークや、他の多くの映画館へと足を運ばせたのです」——アルノー・デブレシャン

この企画は以下の都市にも巡回します。

【京都】3.6(金)～3.12(木)、4.10(金)～4.15(水) @出町座 / 4.13日(水) @同志社大学寒梅館 【大阪】3.7(土)～3.11(金) @シネ・ヌーヴォ

第2回 映画/批評月間～フランス映画の現在をめぐって～

主催: アンスティチュ・フランセ日本 | 共催: ユーロスペース、横浜シネマ・ジャック&ベティ | 助成: アンスティチュ・フランセパリ本部、ユニフランス | アンスティチュ・フランセ日本、映画プログラム、オフィシャル・パートナー: CNC、徳川日仏財団、TV5 MONDE | フィルム提供及び協力: BAC Films、ビターズ・エンド、セルロイド・ドリームス、フィルム・ブティック、レ・フィルム・ベレアス、キノフィルムズ、モッキー・デリシャス・プロダクツ(MDP)、ピラミッド・フィルム、タマサ・ディストリビューション、トランスフォーマー、SBS、東北新社 STAR CHANNEL MOVIES、ユニフランス | 特別協力: アルテ、コミュニケーション | 字幕制作協力: Bart.lab、ヴッター公園、佐宗千加

Mois de la critique - nouveaux rendez-vous du cinéma français

organisé par l'Institut français du Japon | co-organisé avec Eurospace, Yokohama Cinema Jack & Betty | avec le soutien de: Institut français, CNC, Fondation Sasakawa, TV5 MONDE | Remerciements: BAC Films, Bitters End, Celluloid Dreams, Film boutique, la Les Films Pelléas, Kino Films, Mocky Delicious Products, Pyramide Film, Tamasa Distribution, Transformer, SBS, Tohokushinsha STAR CHANNEL MOVIES, Unifrance | Avec la collaboration spéciale: Arte, Japan Community Cinema | Avec l'aide de: Bart.lab, Vutter Koen, Chika Saso

ユーロライブ Euro Live

- 3.12 (木) 12:45 **見えない太陽 L'Adieu à la nuit** (102分)
上映前、オリヴィエ・ペールによる作品紹介あり
précédé d'une présentation du film par Olivier Père
- 15:30 **アリスと市長 Alice et le Maire** (105分)
上映前、オリヴィエ・ペールによる作品紹介あり
précédé d'une présentation du film par Olivier Père
- 18:30 **リベルテ Liberté** (138分) *
アフタートークあり(ゲスト:青山真治、オリヴィエ・ペール)
suivi d'une discussion avec Shinji Aoyama et Olivier Père

料金(税込):一般・学生・シニア1,200円/ユーロスペース・アンスティチュ・フランセ東京・横浜会員1,000円 *18:30の回のみ一般・学生・シニア1,600円/ユーロスペース・アンスティチュ・フランセ東京・横浜会員1,200円

3月9日(月)午前0時よりユーロスペースHPにて、同日開館時よりユーロスペース窓口にて、すべての回のチケットをご購入いただけます|全席指定席|上映開始10分前開場|上映開始10分後以降の入場はご遠慮ください。

渋谷・文化村前交差点左折

Tel: 03-3461-0211 | www.eurospace.co.jp



kino cinéma 横浜みなとみらい

kino cinéma Yokohama Minatomirai

- 4.16 (木) 19:00 **マダム・ハイド Madame Hyde** (96分)
アフタートークあり(ゲスト:セルジュ・ボゾン、結城秀勇)
suivi d'une discussion entre Serge Bozon et Hidetaka Yuki

一般:1,500円/リピーター割:1,300円(窓口のみ、要チケット提示)/
kino cinéma メンバーシップ:1,000円/アンスティチュ・フランセ会員:1,200円(窓口のみ)
チケット販売:HPでは上映日2日前(AM 0:00~)、窓口では上映日2日前の劇場
OPEN時間より|全席指定|上映開始10分前開場(予定)

kino cinéma 横浜みなとみらい

〒220-0012 神奈川県横浜西区みなとみらい4-7-1(TSUTAYA横浜みなとみらい店2階)

Tel: 045-264-4572

横浜シネマ・ジャック&ベティ

Yokohama Cinema Jack & Betty

- 4.17 (金) 17:40 **赤いトキ L'Ibis rouge** (80分)
上映前、セルジュ・ボゾンによる作品紹介あり
précédé d'une présentation du film par Serge Bozon

- 19:40 **ティップ・トップ ふたりは最高 Tip top** (107分)
アフタートークあり(ゲスト:セルジュ・ボゾン)
Suivi d'une discussion avec Serge Bozon

一般:1,500円/大専1,200円/シニア1,100円/
高校以下、ジャック&ベティ会員、アンスティチュ・フランセ会員:1,000円
アンスティチュ・フランセ横浜会員は、ポイントカードの3ポイントで1回無料|チケット販売:
上映1週間前より劇場窓口にて|全席自由(整理番号順)|上映開始10分前開場
横浜シネマ・ジャック&ベティ
〒231-0056 横浜市中区若葉町3-5-1
Tel: 045-243-9800



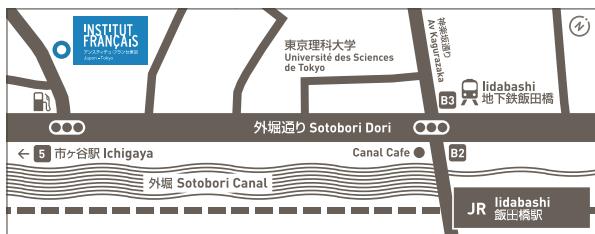
[会場・お問い合わせ]

アンスティチュ・フランセ東京(旧・東京日仏学院)

〒162-8415 東京都新宿区市谷船河原町15

Tel. 03-5206-2500 | Fax. 03-5206-2501

www.institutfrancais.jp/tokyo/



アンスティチュ・フランセ東京

Institut français du Japon - Tokyo

- 3.13 (金) 18:30 **ソロ Solo** (87分)
上映後、オリヴィエ・ペールによるレクチャーあり
suivi d'une conférence d'Olivier Père
- 3.14 (土) 10:00 **君は愛にふさわしい Tu mérites un amour** (107分)
上映前、オリヴィエ・ペールによる作品紹介あり
précédé d'une présentation du film d'Olivier Père
- 13:00 **レクチャー Conférence d'Olivier Père** *
「映画を見せること、語ること、作ること—上映、製作、配給の
現在、そして国際共同製作の可能性について」
(講師:オリヴィエ・ペール、聞き手:土田環)
« **Montrer, parler et produire le film - situation
de la production et distribution française et
possibilité de la co-production** »
- 15:30 **シノニムズ Synonymes** (123分)
上映前の作品紹介およびアフタートークあり
(ゲスト:オリヴィエ・ペール、富田克也、五所順子)
suivi d'une discussion avec Junko Goshō, Olivier Père et
Katsuya Tomita
- 3.21 (土) 12:00 **カブールのツバメ Les Hirondelles de Kaboul** (82分)
- 14:15 **君は愛にふさわしい Tu mérites un amour** (107分)
- 17:00 **ディアスキン 鹿皮の殺人鬼 Le Daim** (77分)
- 3.22 (日) 12:45 **ディアスキン 鹿皮の殺人鬼 Le Daim** (77分)
- 14:45 **カブールのツバメ Les Hirondelles de Kaboul** (82分)
- 17:00 **アリスと市長 Alice et le maire** (105分)
- 4.4 (土) 11:15 **見えない太陽 L'Adieu à la nuit** (102分)
- 13:45 **奇跡にあずかった男 Le Miraculé** (87分)
- 17:00 **今晚おひま? Les Dragueurs** (78分)
- 4.5 (日) 14:00 **今晚おひま? Les Dragueurs** (78分)
- 16:00 **ジャン・ドゥーシェ、ある映画批評家の肖像
Jean Douchet, l'enfant agité** (85分)
アフタートークあり(ゲスト:岡田秀則、廣瀬純、須藤健太郎)
suivi d'une discussion avec Hidenori Okada, Jun Hirose
et Kentaro Sudoh
- 4.11 (土) 12:30 **ジャン・ドゥーシェ、ある映画批評家の肖像
Jean Douchet, l'enfant agité** (85分)
- 14:45 **奇跡にあずかった男 Le Miraculé** (87分)
- 17:00 **言い知れぬ恐怖の町 La Cité de l'indicible peur** (92分)
- 4.12 (日) 14:30 **フランス La France** (102分)
- 17:00 **モッズ Mods** (60分)
- 4.18 (土) 12:30 **奇跡にあずかった男 Le Miraculé** (88分)
- 15:00 **モッズ Mods** (60分)
- 17:00 **フランス La France** (102分)
アフタートークあり(ゲスト:セルジュ・ボゾン)
suivi d'une discussion avec Serge Bozon
- 4.19 (日) 14:00 **Ciné-lycée
アリスと市長 Alice et le maire** (105分)
上映後、講義あり(講師:須藤健太郎)
Suivi d'une conférence de Kentaro Sudoh

一般:1,200円/学生:800円/会員:500円

*3/14(土)レクチャーは入場無料(12:45より先着順)

●前売券:Peatixにてご購入ください <https://iftokyo.peatix.com/view#>

予定枚数完売の場合は当日チケットの販売はない場合がございますので、ご注意ください。

●当日券:上映当日各回の30分前から上映開始10分後まで。

チケット販売時間内には、当日すべての回のチケットをご購入いただけます。

上映開始15分前開場|全席自由(整理番号順)|上映開始10分後以降の入場はご遠慮ください